

みんなの民放史

題字 中川 順

ジョクジャカルタ放送局開設秘話

—トラブルとクーデターに脅えた日々—

柏倉 ^{こういつ} 宏 肆 (HBC)

1965年7月19日午後8時40分、JAL711便はこれが首都の国際空港か?と疑いたくなる暗い空港に着陸した。一時間前に飛び立ったシンガポール空港の眩しさとは対照的なジャカルタ空港であった。ホテルで床に就いたのは真夜中過ぎだった。

日本がインドネシアへの戦時賠償の一つとして中部ジャワの古都ジョクジャカルタに放送局を作り、あわせてジャカルタから約500kmのマイクロ回線と、バンドンとスマランに中継局を建設するプロジェクトだった。

すでに前年にはジャカルタに本局が完成、NHKから出向した職員の指導で、放送を始めていた。ジョクジャの工事全体の監督と落成後の技術指導ということで私が派遣されたのだった。

局舎、鉄塔、受電工事はすべてインドネシアの業者が7月末までに完成させておく。日本勢は機器の復元、調整を行い、独立記念日

の8月17日には間違いなく電波を発射させること、というのが出国前の指示であった。

楽勝モードで出掛けたが、翌日、情報相に続きTV-R1 (Televisi Republik Indonesia) 本部に挨拶に行ったところから一抹の不安を感じ始めた。

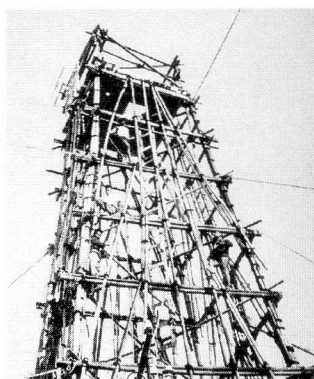
前年に納めた新品のカメラや調整卓、それに送信機などがほこりにまみれ、手入れされた形跡がない。調整室の系統図を見せて欲しいといったらそんな図面は見たことがないという。さらに挨拶の後すぐジョクジャカルタに出発するつもりだったが、「旅行許可証」を持たない外国人の移動はダメ、と言われ不安はつのった。

バンブータワー

2日間待つて、ようやく許可証を入手。遅れを取り戻すべくジープで夜通し走り続けてジョクジャカルタに着いたのは7月23日の昼前だった。到着早々、眠気を吹き飛ばされた。完成しているはずの130mの送信タワーがまだ半分ほどしか出来ていない。8月17日には電波を出すなんて絶望的だ。何とか、形だけでも電波を出さな

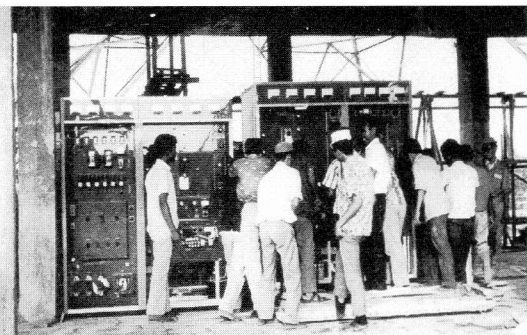
いと契約違反になると主契約者の商社が懇願する。

建設途中の鉄塔側面にアンテナをつけて電波を出すことも考えたが危険至極。「代わりのタワーがあればな!」と呟いたら、「竹で作ろう」と現地監督。「エーッ? 竹でー?」と思ったが他に妙案はない。直径30センチ、長さ10mほどの太い竹を4本束ねて一本の柱とし、これを4隅に建て、驚いたことにたった5日間で、20m程の結構ガッチリしたタワーを作り上げてしまった。



竹で作ったアンテナ

他も推して知るべし。送信機は柱と天井だけで壁がない部屋に据え付けることになった。壁の代わりに竹で編んだアンペラで囲うという。砂ぼこりは、屋外と変わらない。「故障の原因になる」と反対したが、「期日通りに電波を出



壁のない送信機室、裏に鉄塔の脚が見える

さないとい日本人は全員拘束」と言われたという商社の論理に押し切られてしまった。このツケは大きかった。

送信機は札幌・手稲山のHBCと同じ10kwだ。2ダイポールアンテナ1面に定格パワーを加えたらいつべんに焼けてしまう。パワーを下げ何とか見られる画にするのに完全に1日かかった。普通はパワーを出すのに苦労するものだが、苦心惨憺の末、曲がりなりにも電波を出せるようにしたというのに、肝心の8月17日にはジャカルのタで開かれた独立記念式典とスカ

ルノ大統領の画はとうとう来なかった。

政情不安その他いろいろな理由や思惑があったようだが、約束を死守した日本人はまさにドン・キホーテとサンチョ・パンサ。

この頃になって、毎日熱心に見学に来る近所の高校生と思っていた若者たちが新局の技術者だと知らされた。ジャカルタで一年間送信機を担当していた1名とスタジオ機器を担当した1名、東芝の工場で1ヶ月実習したという2名が経験者。あとは高校出たての新人。開局後、運用しながら訓練していくという。

故障 故障 故障

ほこりだらけの部屋に機器を据え付けたことの報いは東芝の技術者が全員帰国し、私が一人ぼっちになるのを待っていたかのように襲って来た。

最初の故障はカメラだった。高圧部を中心にほこりがコビリ着いていた。取扱説明書と首つ引きでなんとか直した。

ホッとしたのも束の間、真空管のクラックが起こった。放熱フィンの間に綿くず状のゴミが引つか



送信機担当者は全員高校を卒業したばかり

かり、それに細かい砂が付着し、ガラスにヒビが入っていた。

街から約40kmのところにメラピ山という標高2910mの活火山があり、火山灰の多いところだと聞かされたが後の祭り。

続いて音声エキサイターの異常発振。画面に音の成分が入っているのではないかと目を凝らしてみていると、見る間に画面はメチャメチャになってしまった。青くなっていたが真空管のソケット一本ずつをガソリンで洗い、抵抗を数本と真空管を交換したら直った。結局2日かかった。

次は乱像。画面の下が横に流れる。映像変調段の真空管一本が原因だった。横着して変調盤の裏のコネクタを手探りで外そうとして高圧に触ってしまった。棒状のもので強く叩かれたようだった。恥ずかしさと面目なさで今まで誰にも話さなかったが、事故故になる場所だった。左手の甲と手首に開いた3つの深い傷には軟膏を塗りこんで知らぬ顔をしていたが、帰国後、何年も冬になると疼いた心も疼いた。横着は「命取り」を実感した。

それもこれもほこりと湿気が原因とにらんで、送信機室の壁が完成したところだったので、担当全員に床を雑巾がけさせようとしたところ、「掃除をするのは他の人の役目だ、どうして自分たちが？」と言う。カースト制に似た意識か? 「砂ほこりを除くのだ」と私が始めたら皆ついてきた。その後故障は減ったから効果はあったのだろう。

シンクジェネレータの故障は文字通り往生した。使っていたトランジスタが本当によく壊れた。アチラを直したと思ったらコチラが壊れ、まるでモグラ叩き。落ち着

くまで2ヶ月はかかった。

今のメガワティ大統領の父親スカルノ大統領が失脚したのはこの年である。そのきっかけになった9・30事件が起きたのは、丁度、アンテナの完成も目前、そろそろ本放送の準備にかかろうというときだった。

9・30事件

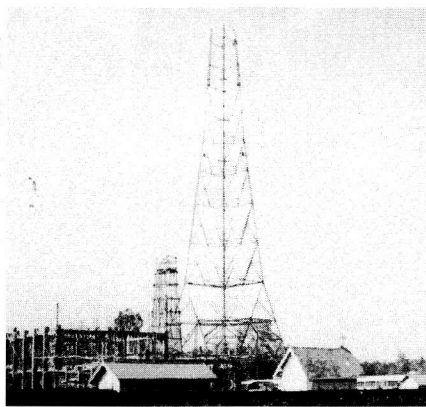
1965・9・30。インドネシア陸軍左派の一隊が軍要人を拉致、殺害して革命評議会を設立するが、翌夜、スハルト少将の軍隊がこれを一掃、スカルノ政権下で権力を握っていた共産主義勢力を排除する。このクーデターの背後に中国があるとの噂が流れ全土で中国系の人々の虐殺がはじまった。川はその死体で赤く染まったという。この結果、66年、スカルノはスハルトに大統領権限を委譲することになる。

この事件の引き金となったクーデターのため、アンペックスの技術者は来ないことになり、VTRの復元、立ち上げのためにTVRI本部から担当者が来た。どうしても動かないので見てくれという。電源電圧を測ったら70%しかない。配線をたどっていったら部屋の隅

に置いてあった2つのドラムを経由して繋がっていた。巨大リアクタンスによる電圧降下なんて初体験だった。

マイクロが切れ、故障はどこだ?と怒鳴っていると、「燃料が切れた」などというノンビリした連絡が来ることもしばしばだった。連絡が来るうちは良いのだが、音沙汰もないまま丸一日待たされることもあった。

これに1人で取り組んでいたのだから普通ならノイローゼになっても不思議はないところだが、イライラしたことは勿論、切迫感を感じたことすら無かったのは今もって不思議である。クーデター騒



未完の鉄塔と仮のパンブータワー

ぎでテレビどころではないという周りの雰囲気、それに、受像機の普及がゼロに近いという環境だったからだろう。

ジープでウインチ

話は前後するが、鉄塔建設のペースがあまりに遅く、仮放送を始めて1ヶ月経ってもようやく半分の高さになったばかり。この分ではいつになったら帰国できるのか、とアンテナ担当の住友電工の2人、イライラし始めていた。

「ウインチが無いのならジープで引つ張ったら?」と言ったのが災いの元、自分がウインチ役を務めるハメに陥ってしまった。最上部に取り付けた滑車を介して部材を引つ張り上げるのは人力方式と同じだが、手で引つ張る代わりにロープの端を鉄塔の真下に固定した滑車に通しさらに水平方向に伸ばして、これをジープで引つ張ればと考えた。住電の山田さんが塔頂、富永さんが地上で全体を指揮し、私はジープで引つ張る役。笛の合図で前進・後退して、現地業者が一ヶ月かかると言っていた仕事を6日で仕上げ、「ジパニバグースカリ(日本人、最高)」と

拍手喝采を受けた。

この時の写真が一枚も無いのが残念である。カメラを持っていた3人、全員が必死で働いていたから撮る人がいなかった。

反乱軍の占拠

9・30事件当日も、翌10月1日もジョクジャでは何も変わったことはなく、夜、シンガポールのBBCを聞いていて始めて何か起こったらしいことを知った程度だった。でも、ジョクジャなんて田舎は大丈夫だろうと寝ていた3日の真夜中、近くでダ・ダ・ダ・ダと機関銃らしい音が響き、何人かが走り回る音が聞えた。「こりゃ本物だ!」と飛び起きた。

実は、その日ギックリ腰気味になり、サロンパスを貼って早めに寝ていた。銃を持った連中に踏み込まれたらとても逃げ切れない。「ベッドの下に隠れようか」「いや、すぐに見つかって撃たれる、かえってマズイ」。まんじりともしないで朝を迎えた。

朝、まだ暗いうちに局長のデワボラタ氏があたふたと来て、「大変だ。この家から一步も出たらダメ。トランジスタラジオを貸して」

と言つて私の唯一の耳を持つて行つてしまった。身辺警護に大学生3人を宿舎に常駐させてくれた。

反乱軍がテレビ局を占拠に来たのはその3日後だった。本アンテナが未完成だったので防塵対策に送信機や放送機器にはカバーを被せており、ライダーも切り離してあったので、当分放送は出来ないといわかったのだろう、3日ほどで引き上げた。

ラジオ局では抵抗した局長が射殺され、何人かが拉致された。こういうときには放送局は最初に狙われるということが身に沁みた。

街中で反乱軍による略奪、殺人が頻発、反乱軍に対する反感が広がった。そのうちに、反乱は中国共産党が支援しているという噂が流れ、今度は中国系住民に対する焼き討ちや殺戮がはじまった。

「カシさんは中国人と同じ顔、用心して」と言われ、専用車の前にインドネシア国旗と日の丸を並べて張り、白いハンカチにマジックで丸をかけた日の丸を胸ポケットに持ち歩くようにした。

状況がエスカレートし「ジャカルタに集まれ」との大使館からの連絡で、10月下旬、ジャカルタに



鎮圧に来た政府軍の戦車が木の蔭に見える

一次待避したが、空港で日の丸を翻した迎えの車を見たときは思わず涙が出てきたのを覚えている。機関銃の音や戦車の空冷ディーゼルエンジンのナマの音は不気味である。いつ狙われるかと思うと心臓が縮み上がる思いがする。

11月初旬、治安が落ち着いたとの報告で再びジョクジャに戻ったが、結局、この安定は長くは続かなかった。

12月上旬になると周辺でもムゴたらしい事件が連続した。私は日本に一旦引き揚げ、政情が安定した後に再度赴任と決まり、ジョク

ジャを後にした。機器もようやく落ち着いて、今度こそ安定した放送を始められる、年末年始は家族を呼んで、バリ島で過ごそうというアマイ計画は吹っ飛んだ。

インドネシア情勢が落ち着いたのは数年後だった。結局、私の再度の赴任は消えてしまった。

あの人、この人

3年前の夏、ジョクジャカルタに出来た国立マルチメディア研修所で「放送技術の基礎」の講座を持たないかという話があった。喜んで引き受けた。

街に入つて真っ先に探したのは私自身ジープで引張つて建てた鉄塔だった。35年前は田んぼの中にあつたテレビ局も、今では街のまん中にあつた。鉄塔はUHFのアンテナを増設して堂々と建つて



街中にそびえるアンテナ

いた。局に顔を出したらなんと、往時の生徒が1人残っていて、バンブー・タワーやクーデター時の話に花が咲いた。翌年、定年と聞いて改めて年月を感じた。

ジャカルタで開かれたデジタル放送シンポジウムに出てまたびっくり。当時、TV・RI本部の技術局長をしていたスマルトノ氏、ジョグジャ局長のデワボラタ氏、送信機修理の手伝いをしてくれたジヨコ君、シンクジエネレータ修理を手伝ってくれたスバルト君、ダルソー君たちが待っていた。みんな歓迎パーティを開いてくれた。バンブータワーとホコリ対策はみんなの印象に強烈に残っていた。当時、私はよく、床に図面を広げ、あぐらをかいては「ヘンダナー、ア、ソーカ、ソーカ」と独り言を言っていたと誰かがマネをしたり、大笑のパーティだった。

それにしても、みんな偉くなっていた。デワボラタ氏はドイツのハイデルベルク大学を出たエリート。案の定、日本で言う事務次官まで務め上げて、リタイア。

「デワ」とは高貴な男性につける敬称とのこと。女性には「デウイ」。テレビなどで見かけるお方は

高貴な出なのだ。スバルト君はTV・RI本部の技術局長を務め、関連会社社長。ジヨコ君はTV・RIを離れ、国のデジタル放送技術研究会の座長という要職を務めていた。教え子の出世を喜ぶ老教師の心境だった。

終わりに

思い出すままに雑然と書き連ねたが、マイクロ回線がどうやっても通らず、よくよく調べてみたら地図に無い山に遮断されていたことがわかり、急遽、途中に中継点を一カ所増やしたことも忘れられない。クーデター直後、外国との電話回線は切れ、空港閉鎖で国際線は全てとまったときは心細い思いをしたが、楽しい思い出も多い。

後年、世界遺産になったボロブドール遺跡にも何回か行ったし、やはり世界遺産のブランパン遺跡での月夜のラーマ・ヤーナの幻想的な踊りも忘れられない。

宿舎を提供して頂いた国立ガジヤ・マダ大学の学長先生宅に招待され、この国の上層階級の立ち居振る舞いの優雅さ、上品さに目を見張り、それまで少々見下していた感じの自分を恥ずかしいと思っ

たこともある。

先生の奥さんの妹さんがまた素晴らしい美人。あと半年帰るのが遅かったら……。

美術館や植物園、動物園にも行ったし、軍の病院でムシ菌を1本抜いて貰ったり、変わった経験もした。

引き揚げるとき、ジャカルタの空港で「帰るな、コワレタから戻れ」と、連れ戻しに来はしないかと気になっていた。

JALが国境線を越えたと聞かされたとき、本当に安心したのをいまだに覚えているところを見ると、表向きは強がっていたものの、本心は逃げ出したかったのかも知れない。おのれの弱さを感じた次第である。



ボロブドール遺跡にて(筆者)